

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：62618

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25580098

研究課題名(和文)「呼びかけイントネーション」に関する萌芽的研究

研究課題名(英文)A preliminary study of calling intonation

研究代表者

窪園 晴夫 (KUBOZONO, HARUO)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・理論・対照研究領域・教授

研究者番号：80153328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：呼びかけイントネーションとは、相手の名前を使って呼びかける際に使われるイントネーション(音の高さの変動)である。英語など一部の言語については体系的な研究があるが、日本語についてはほとんど検討されてこなかったテーマである。標準語(東京方言)、鹿児島方言、甑島方言(鹿児島県)などの方言について現地調査を行い、体系ごとのイントネーションを分析したところ、(1)方言によってそのパターンが異なること、(2)親しさや呼びかける距離(近い、遠い)などの要因によって複数のパターンが化可能であること、(3)方言差にも関わらず、基本的に語末(文末)下降によってあらわされることが多い、以上の3点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Calling intonation is the intonation patterns used by speakers when they call someone else by his/ her name. This study collected data based on fieldwork in several dialect areas and analyzed the observed patterns. This study has revealed the following: (i) Different dialects may use slightly different patterns from each other, (ii) more than one pattern is often observed depending on several factors such as the intimacy between the speaker and the hearer, and (iii) despite dialectal differences, the basic pattern in Japanese is a falling pitch associated with the final syllable of the names.

研究分野：言語学

キーワード：呼びかけイントネーション アクセント 日本語 鹿児島方言 甑島方言 小林方言 プロソディー

1. 研究開始当初の背景

日本語の音声研究では、語アクセントや疑問イントネーションの研究は少なくないが、その一方で、「お母さん!」「ねえねえ、お姉ちゃん。」などのように人に呼びかける時に用いられるイントネーション(「呼びかけイントネーション」)に関する研究は少ない。東京方言(標準語)を含め、体系的な研究は皆無と言ってよい。このような状況のもと、申請者は自らの母語である鹿児島方言について予備調査を行い、(1)人に呼びかける時は単語(人名)のアクセント型が変容し、全体として下降調のピッチパターンが出現する、(2)アクセントの中和が起こり、伝統的な2つのアクセント型(A型、B型)の区別が失われる、(3)「シラビーム方言(音節方言)」と呼ばれる鹿児島方言において、シラブルを単位とする語アクセントの原則が破られ、拍(モーラ)単位の音調付与パターンが出現する、(4)疑問文のイントネーションとほぼ同じパターンを示す、などの興味深い結果を得た。

2. 研究の目的

日本語を含む多くの言語において、語アクセントや基本的なイントネーション構造に関するプロソディー研究は少なくないが、「お母さん!」「先生!」のように、人に呼びかける時に用いる「呼びかけイントネーション」に関する研究は非常に少なく、その研究方法もいまだ確立されていない。本研究は日本語諸方言における呼びかけイントネーションの実態を、言語調査および音声実験によって明らかにする。また日本語諸方言の分析をもとに呼びかけイントネーションの類型化を試み、世界の諸言語への応用を模索する。日本語方言の多くが消滅の危機に瀕する中、危機方言の記録・保存のための基礎研究という役割も果たしたい。

3. 研究の方法

本研究の中心は、呼びかけイントネーションに関する(1)方言調査(データ収集)と(2)調査データを用いた音声実験(音響分析、知覚実験)、(3)調査データ、実験データの分析と考察である。語アクセントの体系が明らかにされている日本語諸方言(東京、近畿、栗石、長崎、鹿児島、甕島、喜界島方言他)について各方言5~10名のインフォーマントからデータを収集し、(1)呼びかけによって語アクセント構造がどのように変容するか、(2)疑問のイントネーションとどのような異同を見せるか、以上の2つの問題について分析を行う。音響分析では、呼びかけイントネーションの基本形(下降調、上昇調)を明らかにした上で、(3)母音・音節の長音化を伴うか、またイントネーション(ピッチ)と長さのいずれが重要な役割を果たしているかを考察し、また知覚実験により呼びかけと疑問のイントネーションが区別されているかどうかを検証する。

4. 研究成果

[平成25年度]

調査語彙リストを含めた調査方法について検討を行い、鹿児島方言について予備調査の追試を行った。調査から得られたデータを次の各項目に注目して分析した。(1)呼びかけイントネーションの基本形は下降調か、上昇調か?語末母音(音節の)伸長化を伴うか、伴わないか?(2)呼びかけイントネーションによって、単語のアクセント型が変容を受けるか?受ける場合には、この特徴(ピッチ上昇、下降等)がどのように変容するか?(3)アクセント型の中和を引き起こすか?(4)方言ごとに定まっている音調付与の基本単位(音節、拍)が守られるか?(5)疑問文のイントネーションパターンと区別されるか?(6)インフォーマントの年齢、性別によって、呼びかけイントネーションのパターンがどのような変容を見せるか?以上の点に着眼して調査データを分析し、その結果を海外の研究集会において発表し、英文論文を海外の専門誌に投稿した。

[平成26年度]

鹿児島方言と東京方言(標準語)の呼びかけイントネーションについて調査分析を行った。鹿児島方言については、呼びかけの際に語アクセントの区別が失われるか否かを調べ、A型アクセント(夏男、良子、ばあちゃん、教頭先生他)とB型アクセント(春男、洋子、おばあちゃん、校長先生他)の区別が失われることを確認した。その成果を国際会議(Leiden Workshop on Word Stress and Accent)および国内の学会(日本語学会ワークショップ)等で口頭発表し、またPost-lexical tonal neutralizations in Kagoshima Japaneseと題する英文論文にまとめ、Mouton社の論文集(Tonal Change and Neutralization)に投稿した。東京方言については、「かっとなせえ○○!」や「○○ちゃん、遊ぼう!」といった言い回し・構文において、起伏式アクセント(直子、達也、静他)と平板式アクセント(直美、達男、望他)の対立が失われるか否かを分析し、対立が保持されるという結論を得た。一部のインフォーマントは先行研究が述べているように対立を失っているが、大多数のインフォーマントは先行研究の記述に反して、アクセントの対立が保持されるという明確な言語直感を持っているが明らかになった。

[平成27年度]

鹿児島方言の疑問イントネーションと呼びかけイントネーションについてさらに分析を進めた。特に(1)疑問イントネーションと呼びかけイントネーションにより、アクセント型がどのように変わるか、(2)とりわけアクセント型の対立(A型、B型)が保持されるかどうか、(3)疑問イントネーションのアクセント型と呼びかけイントネーションのアクセント型が区別できるか否か、以上の3点について考察を進めた結果、(1)についてはB型

アクセントが A 型アクセントと同様に下降調で現れるようになることと、呼びかけイントネーションに A 型も B 型も二通りの音調パターン(型と型)が現れることを明らかにした。(2)については、疑問・呼びかけのいずれにおいても、アクセント型の対立が無くなる(中和が起こる)が、その条件は疑問イントネーションの場合がはるかに厳しく、呼びかけイントネーションではかなり自由に中和が起こることがわかった。また(3)については、方言インフォーマントを対象にした簡単な聴覚テストにより、呼びかけイントネーションと疑問イントネーションの音調パターンが聴覚的に区別がつかないことが多いことを明らかにした。

さらに、これらの分析結果を東京方言に関する予備調査の結果と比較したところ、(1)のうち呼びかけイントネーションに見られる下降調は東京方言にも見られるようであるが、疑問イントネーションの下降調は同方言に見られないこと、また、(2)と(3)はいずれも東京方言には見られない特徴であるという知見が得られた。

〔平成 28 年度〕

九州の二型アクセント方言(鹿児島方言、甕島方言)と一型アクセント方言(宮崎県・小林方言)について(i)呼びかけイントネーションの音声特徴と、(ii)呼びかけと疑問のイントネーションの異同について調査研究を行った。鹿児島方言については、呼びかけイントネーションが文末(人名末)のピッチ下降を伴い、それによりピッチ下降を伴わないアクセント型(B型)の語ももう一つのアクセント型(A型)と同じ特徴を持つようになることと、呼びかけ文においてA型とB型のアクセント対立がしばしば失われ中和してしまうこと、さらには疑問文イントネーションとほぼ同じパターンを示すことが明らかとなった。甕島方言については、もともと二つのピッチの山を持つ重起伏型アクセントを有することが知られていたが、B型の語彙においては二つ目のピッチの山が消えることによって呼びかけ文となることが明らかとなった。A型の語彙については調査データが不十分であるために、呼びかけ文でアクセント型の対立が失われるかどうかはまだわからない。また疑問イントネーションとの詳細な異同も未解明である。

アクセントの型が一つしかない小林方言においても、呼びかけ文は文末下降を伴うという観察が得られた。つまり、平叙文では最後の音節(シラブル)が高くなるという語アクセント型に対して、最後の音節内でピッチ下降が起こることによって呼びかけイントネーションとなることがわかった(これは鹿児島方言のB型語彙に見られる呼びかけイントネーションとほぼ同じである)。ただ、この方言では平叙文もしばしば文末下降を伴って発音されることから、平叙文と呼びかけ文が極めてよく似たイントネーション特

徴を示すことになる。両者にどのような違いがあるのか、また疑問文イントネーションとはどのように異なるのか、今後の課題として残った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Kubozono, Haruo. 2016. Diphthongs and word accent in Japanese. *KLS* 36, 195-206.

Kubozono, Haruo. 2015. Japanese dialects and general linguistics. *Gengo Kenkyu* 148, 1-31.

Kubozono, Haruo. Post-lexical tonal neutralizations in Kagoshima Japanese. To appear in H. Kubozono and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*. De Gruyter Mouton (未刊).

Kubozono, Haruo. Focus prosody in Kagoshima Japanese. To appear in R. Goedemans et al. (eds.) *The Study of Word Stress and Accent: Theories, Methods and Data*. Cambridge University Press. (未刊).

〔学会発表〕(計 7 件)

Kubozono, Haruo. Mora and syllable in the pitch accent system of Koshikijima Japanese. 東京外国語大学 A A 研国際シンポジウム ‘Japanese and Korean Accent’、東京外国語大学、東京都府中市. 2016.7.2

窪園晴夫「日本語の音韻研究—わかったこと、やり残したこと」日本音韻論学会春季大会シンポジウム、首都大学東京秋葉原キャンパス、東京都千代田区. 2016.6.24.

Kubozono, Haruo. Question and vocative intonation in Japanese. 上智大学言語学会 30 周年記念大会、上智大学、東京都千代田区. 2015.7.18

窪園晴夫「鹿児島方言における文のプロソディーから見た語のアクセント」日本言語学会 149 回大会ワークショップ、愛媛大学、愛媛県松山市. 2014.11.16.

Kubozono, Haruo. Interactions between lexical and post-lexical tones in Japanese.

International Workshop on Word Stress and Accent. Leiden University, ライデン (オランダ). 2014.8.15-17.

Kubozono, Haruo. Question and vocative prosody in Japanese. ソウル大学言語学コロキウム. ソウル (韓国). 2013.9.13.

Kubozono, Haruo. Word prosody in sentence perspectives. 国立清華大學語言學研究所コロキウム. 新竹市 (台湾). 2013.4.9.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://researchmap.jp/kubozono>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

窪菌 晴夫 (KUBOZONO, Haruo)

国立国語研究所・理論・対照研究領域・教授

研究者番号：80153328

(2) 研究分担者、研究協力者 なし